

あいのその 2023 年 11 月号



「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」

(フィリピの信徒への手紙 4 章 6～7 節)

愛の園保育園 042-325-1045

かつて放送していたお昼のテレビ番組に電話相談のコーナーがありました。嫁姑問題、子どもの問題、夫婦の問題、ご近所同士の揉め事などがその相談内容です。しかし番組の司会者は、よほど特別な事情が無い限り相談者に同情することは少なく、むしろ相談者に落ち度がある場合は激怒して途中で電話を切ることもありました。つまり必ずしも相手の相談にのっているとは言えない状態で番組は進行していくのです。これは、このコーナーが“悩みを相談し解決する”というものではなくて、“話したくてウズウズしていることを電話する”のが基本趣旨だったからです。そもそもコーナーのタイトルも「ちょっと聞いてヨ！おもいっきり生電話」というものですから、聞いてほしいと思うことを話して終わりなのですが、そうとわかっていても電話をかけ悩みを聴いてほしいと思う人が後を絶たなかったのでしょう。とにかく話を聴いてほしい、話せたら少しは気持ちが楽になる、という思いは、私たちにとってよくわかることです。

では、そのような私たちは、この聖書の言葉をどのように受け止めたらいいのでしょうか。著者である使徒パウロは、冤罪によって逮捕され、その獄中からこの手紙を書きました。自分自身、先の見えない苦しみの中にもありながらも、むしろそのことで動揺していた教会の人々を気遣い、励ましの言葉を語ったのです。つまり、ただ単に「思い煩うな」と忍耐を命じているのではありません。私たちはある意味、一生、思い煩いや悩みを抱えて生きざるを得ない者ですが、そのことを理解しつつ、それをありのまま、いつも神に打ち明けなさいとパウロは言います。それは、それこそが、「祈り」というものの本質だからです。そしてこの手紙には、「神があなたと共におられます」「主はすぐ近くにおられます」という言葉が繰り返し出てきます。パウロは獄中にある自分にも、外にいる教会の人々にも、いつも主なる神が共にいてくださるのだということ、だからこそ、決してひとりで悩み苦しんでいるのではないのだということを感じて祈っていたのでしょう。

神を信じて祈れば悩みがすぐに解決したり、明るい展望が見えるようになったりするわけではないかもしれませんが。しかし祈りとは、ただ美しい言い回しや誰かの目を気にした言葉を並べるものではありません。神さまに電話をすることはできませんが、たとえどんな些細な、つまらないようなことであっても、「ちょっと聞いてよ！」と思いのたけをおもいっきりぶつけることが、私たちには許されているのです。

(牧師 西脇 正之)